

## タイ語の/ʔɔ̀k2/を含む動詞連続構造の一考察<sup>(\*)</sup>

ルンルディー・レーオキッティクン

キーワード： タイ語、動詞連続、日本語、複合動詞、否定辞

### 要旨

タイ語には動詞連続構造が見られ、日本語の複合動詞との間に共通点が見られる。本研究では、日本語の複合動詞「～出す」と「～出る」に相当するタイ語の/ʔɔ̀k2/<sup>(1)</sup>を対象にした。/ʔɔ̀k2/という動詞は多義語であり、動詞連続構造内で現れるとき、どのような意味的、統語的な関係を持つか、分析した。その結果、次のようなことが分かった。/ʔɔ̀k2/という動詞は動詞連続構造内の動詞 1 と動詞 2 の位置に来ることができる。動詞 2 の位置に来る場合、すべての対象は語彙的な意味を持つことが分かった。また、/ʔɔ̀k2/が動詞 2 の位置に来るとき、動詞 1 との間には否定辞が入ることができない。一方、/ʔɔ̀k2/が動詞 1 の位置に来る場合、「動作開始」という意味を示すことができるということが分かった。しかし、すべてそう説明することができない。「(何のために) あるところへ移動する」という意味を示すこともある。

### 0. はじめに

日本語の複合動詞というものは、外国人学習者にとっては日常会話で使ってみたいと思ってもなかなか使えないものである。特に、日本語の複合動詞「～出す」の中に、統語的なものと語彙的なものが入っていてそれぞれの動詞はどんな意味を示しているか、理解しにくいものである。そこで、日本語の複合動詞「～出す、～出る」に相当する/ʔɔ̀k2/を用いた動詞連続がどんなものを明らかにすることによって、日本語の「～出す」、「～出る」を用いた複合動詞を理解する助けになるのではないかと考える。したがって、本研究では、タイ語の動詞連続構造内で現れる/ʔɔ̀k2/の意味的、統語的な性質を探ることとした。

### 1. タイ語の/ʔɔ̀k2/という動詞

タイ語では、/ʔɔ̀k2/という動詞は多義語であり、文の中で語順によって様々な役目を持つ動詞である。そして、統語部門でも意味部門でも様々な機能を持っている。

Chantavibulya (1962), Phanupong (1989)は、文の中では語順によって品詞が決められると主張した。それで、Phanupong 氏はどのような言葉がどんな品詞になるのか、テ

スト枠を提案した。同じところに現れるものは同じ品詞になることを意味する。Wongsri (2004)は Phanupong 氏の語順の位置の規則から /ʔɔk2/ を五つの種類に分けることができる」と述べた。

1) /ʔɔk2/ は自動詞 (Intransitive verb)である。

自動詞であることを示すテスト枠は、以下の通りである。

A) \_\_\_\_\_ 1 \_\_\_\_\_ 2 \_\_\_\_\_ lɛw4

過去

B) \_\_\_\_\_ 1 \_\_\_\_\_ kamləŋ \_\_\_\_\_ 3 \_\_\_\_\_

継続

A テスト枠の 2 番と B テスト枠の 3 番に現れることができるのは自動詞だが、両方のテスト枠の 1 番に現れることができるのは名詞であると記述した。例えば、

1 fon5      tok2      lɛw4

雨      降る      ~た

「雨が降った。」

2 fon5      kamləŋ      tok2

雨      ~ている      降る

「雨が降っている。」

A)と B)テスト枠を見ると、/ʔɔk2/も/tok2/のように自動詞であることがわかる。/tok2/と同じ場所に現れることができるからだ。例えば、

3 ɲənduan      ʔɔk2      lɛw4

給料      出る      ~た

「給料がもう出た。」

4 ɲənduan      kamləŋ      ʔɔk2

給料      もうすぐ      出る

「給料がもうすぐ出る。」

2) /ʔɔk2/は他動詞 (Transitive verb)である。

この場合も次のようなテスト枠がある。

C) Noun 2 Noun lɛw4

D) Noun kamlɔŋ 3 Noun

Cテスト枠の2番とDテスト枠の3番に入る場合、他動詞であると述べた。

5 nɔŋ4 khian5 cot2maay5 lɛw4

弟/妹 書く 手紙 ~た

「弟/妹はもう手紙を書いた。」

6 nɔŋ4 kamlɔŋ khian5 cot2maay5

弟/妹 ~ている 書く 手紙

「弟/妹は手紙を書いている。」

/khian5/はCテスト枠の2番とDテスト枠の3番に現れることができるので、他動詞である。それでは、/?ɔk2/はどうであろう。

7 khaw5 ?ɔk2 naŋ5suu5 lem3 may2 lɛw4

彼 出す 本 類別詞 新しい ~た

「彼はもう新しい本を出した。」

8 khaw5 kamlɔŋ ?ɔk2 naŋsuu5 lem3 may2

彼 ~ている 出す 本 類別詞 新しい

「彼はいよいよ新しい本を出す。」

以上のように、/?ɔk2/は他動詞でもある。

3) /?ɔk2/は補助動詞で、動詞の後ろに現れる。これを Phanupong 氏は Post-verb と呼ぶ。Post-verb というのは動詞の後ろに現れるもので、動詞なしで自立して現れることはなく、音声的には強調しない(unstressed)と述べている。このグループに属するものは 11 語あり、/?ɔk2/はその一つである。ところが、これに関して Phanupong 氏はテスト枠を提案しなかった。Phanupong(1989)は動詞の後ろに現れる/?ɔk2/は「あるところからあるところまで移動し、もっと幅を広げる」という意味を表すと述べた。例えば、

- 9 khaw5 dæən ʔɔk2 caak2 hɔŋ3  
 彼 歩く 出る から 部屋  
 「彼は部屋から歩いて出ていった。」

4) /ʔɔk2/は助動詞であり、動詞の前に来る。例えば、

- 10 thæə ʔɔk2 caʔ2 tuuun2ten3  
 彼女 助動詞 未来 緊張する  
 「彼女は緊張しているようだ。」

/ʔɔk2/は本動詞である /tuuun2ten3/の前に来る。

5) /ʔɔk2/は副詞でもあり、動詞の後ろに来る。次のようなテスト枠に現れることができる。

E) Noun Verb(Intransitive verb) \_\_\_\_\_

- 11 lɔn2 caydii ʔɔk2  
 彼女 優しい とても  
 「彼女はとても優しいですよ。」

以上のように、Phanupong の語順の位置の規則によって /ʔɔk2/ を五つのグループに分けることができた。

## 2. 動詞連続構造とは

一つの言葉がどういう役目を持っているかということについては、Phanupong 氏は、その言葉が文の中に現れている位置を基準として分析した。/ʔɔk2/のような言葉が動詞の後ろに現れたから、補助動詞としての役目を持っていると記述した。ところが、これに関しては、Kingkarn Thepkanjana(1986, 2006)がこのようなものを動詞連続構造 (Serial verb construction) と定義している。

動詞の後ろに来る場合、/ʔɔk2/の前に現れる動詞は自動詞でも他動詞でも可能である。

- 12 khaw5 wɪn3 ʔɔk2 pay  
 彼 走る 出る 行く  
 「彼は走って出ていった。」

13 khaw5 yip2 dinsɔɔ5 ?ɔk2 caak2 lin4chak4  
 彼 取る 鉛筆 出す から 引き出し  
 「彼は鉛筆を引き出しから取り出した。」

Thepkanjana 氏の研究では、それぞれの動詞連続構造はどのような役割を持っているかという側面から分類し、グループに分けた。例えば、方向を表すもの(Directional)、原因を表すもの(causative)などである。また、それぞれのグループに入っている動詞連続構造を統語的、意味的に分析した。この研究では、/?ɔk2/は方向を表す動詞連続構造のグループに入っている。この種の動詞連続構造の中では動詞は六つまで連続することができる。

1	2	3	4		5
			4a	4b	
Initial verb 動詞 1	Geometric shape of the path	Direction with respect to the previous path	Direction with respect to the outside world	Direction with respect to an object located in the outside world	Direction with respect to speech act participants
	won “circle” 「回る」 troŋ “go straight” 「まっすぐ行く」 khot4 “zigzag” 「曲がりくねる」 chee5“veer” 「まっすぐでない」	yɔɔn4 “reverse” 「戻る」 thɔɔy5 “retreat, back up” 「退く」	lɔɔy “pass” 「過ぎる」 phaan2“pass” 「通過する、経過する」 klap2 “return” 「帰る」 taam “follow” 「追随する」 khaam3 “cross” 「渡る」 caak2 “leave” 「離れ去る」	khaw3 “enter” 「入る」 <b>?ɔk2“exit”</b> 「出る」 <sup>(2)</sup> khun3 “ascend” 「上がる、上る」 loŋ“descend” 「下がる、下りる」	pay “go” 「行く」 maa “come” 「来る」

表 1：方向を示す動詞連続構造の中の動詞の順番を表すもの(Thepkanjana1986：136)

これまで動詞連続構造についての先行研究は、様々な定義で分析されたので、その結果、得られたデータがいろいろ違ってくる。しかし、様々な言語の動詞連続構造に関する多くの先行研究では、動詞連続構造についての定義がこのように挙げられてい

る。いわゆる、動詞連続構造(Serial verb construction)とは、動詞 1 と動詞 2 の間には何の要素も入らずに 2 語以上の動詞が連続し、これらの動詞それぞれが自立動詞として単文で現れることができる。また、動詞 1 と動詞 2 の間に現れることができるのは名詞しかない。ただし、この名詞は現れても現れなくてもよい。(Thepkanjana 2006 : 94)

ところが、Thepkanjana 氏は(2006 : 143)タイ語では、動詞連続構造内の動詞 1 と動詞 2 の間に否定辞も現れることができると述べた。例えば、動詞連続構造の動詞 2 が動詞 1 の行為の結果を示すもの、動詞連続構造の動詞 2 が動詞 1 の示している出来事をさらに説明するものなどにおいては否定辞が動詞 1 と動詞 2 の間に現れることができる。

14 khaw5 piŋ3 plaa may3 suk2  
 彼 焼く 魚 否定 焼ける  
 「彼は魚を完全に焼いていない。」

15 khaw5 waat3 ruup3 may3 keŋ2  
 彼 かく 絵 否定 上手  
 「彼は絵を上手に書けない。」

したがって、動詞連続構造の動詞 1 と動詞 2 の間に現れるのは名詞だけではなく、否定辞が現れることもできるということになる。しかし、否定辞が入ることによって単文(A Prototypical monoclausal structure)として考えるのはちょっと無理があるのではないかと思われる。また、動詞連続構造は二つ以上の動詞が連続してその間には動詞 1 の目的語以外何の要素も入らないため、以上の(14) と(15) は動詞連続と呼ぶのがまだ矛盾があるようだ。

本研究では、/?ɔk2/が動詞 2 の位置に来る場合、動詞 1 と動詞 2 である/?ɔk2/の間に否定辞/may3/が入ることができたら、それが動詞連続ではなく、補助動詞としての役目を持っているとしたい。

16 khaw5 ?aan2 naŋsuu5 may3 ?ɔk2  
 彼 読む 本 否定 できる  
 「彼は本が読めない。」

17 khaw5 nuuk4 may3 ?ɔk2  
 彼 思う 否定 できる  
 「彼は思い出せない。」

以上の例は、/?ɔk2/が本来の意味を示すのではなく、いわゆる自立動詞として単文で現れることができないため、このようなものは本研究の対象外とする。したがって、本研究では、動詞連続構造は以下のように定義をしておきたい。

「動詞連続構造とは、二つ以上の動詞が連続してその間には何の要素、ポーズも入らず、動詞 1 の目的語としての名詞だけが許容される。また、動詞 1 と動詞 2 はそれぞれが自立動詞として単文で現れることができること。」

### 3. タイ語の/?ɔk2/を含む動詞連続構造の意味的、統語的な性質

第 3 節では、/?ɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 と動詞 2 の位置に来る場合、他の動詞とどのような意味的な関係や形態的な特徴を持っているかということについて述べる。まず、/?ɔk2/が動詞連続構造の動詞 2 の位置に来る場合から見て行きたい。

#### 3.1 /?ɔk2/が動詞 2 の位置に来る場合

##### A. 動詞連続構造の動詞 2 の位置に来る/?ɔk2/と動詞 1 との間の意味的な関係

##### 1) 二つの出来事が同時に行われる場合

/?ɔk2/が動詞 2 の位置に来る場合、/?ɔk2/の前に来る動詞は動作動詞や移動動詞で、/?ɔk2/がそのあとにつくと、二つの出来事が同時に行われ、またそれらの出来事は同じ主語で行われることを示す。以上の性質を持つ/?ɔk2/と連続した動詞連続の多くは以下のようなパターンを持つ。

1. 動詞 1	1 項	動作主		} 動詞連続全体の性質を現す
動詞 2	2 項	動作主	起点	

18 khaw5 dæn ?ɔk2 caak2 baan3

彼 歩く 出る から 家

「彼は家から歩いて出ていった。」

2. 動詞 1	1 項	対象		} 2 項 対象 起点
動詞 2	2 項	対象	起点	

19 thanuu laay5dɔk2 phuŋ3 ?ɔk2 caak2 khansɔn5

矢 何本も 突く 出す から 弓

「たくさんの矢が弓から放たれた。」

3. 動詞1 1項 対象 } 1項 対象  
 動詞2 1項 対象 }

20 baymay2 kamləŋ ŋəək3 ʔəək2 maa  
 新芽 ~ている 萌える 出る 来る  
 「新芽が萌え出る寸前だ。」

21 rəyym4khəŋ4khaw5 caʔ2 praakot2 ʔəək2 maa hay3hen5 thuk4khrəŋ4  
 彼の微笑み 未来 現れる 出る 来る 見せる いつも  
 「彼の微笑みはいつも顔に出て見せてくれる。」

(20)と(21)の例は、/ʔəək2/の後に/maa/がつくのは文としては自然な文になる。なぜか  
 というと、「萌えること」や「現れること」が内側から外に出すという動きを具体的に  
 強調するため、/maa/を用いて方向性を示すのが最も理解しやすいからだ。

4. 動詞1 1項 動作主 } 1項 動作主  
 動詞2 1項 動作主 }

22 khaw5 klap2 ʔəək2 pay  
 彼 帰る 出る 行く  
 「彼は帰って出て行った。」

2) もう一つの動詞が様態を表す場合

/ʔəək2/の前に来る動詞は動作態度や動作のやり方などを示すものである。今回の調  
 査では、このような意味関係を示すものは四つあった。/lian3/ (避ける)、/riip3/ (急  
 ぐ)、/lak4ləp3/ (密やかに行う)、/ʔεp2/ (こっそりする) である。

23 phuak3raw lian3 ʔəək2 caak2 həŋ3 nan4  
 我々 避ける 出る から 部屋 その  
 「我々はその部屋にいるのを避けて出た。」

24 khaw5 riip3 ʔəək2 ruua thanthii  
 彼 急ぐ 出す 船 すぐ  
 「彼はすぐ船を出した。」

25 khaw5 riip3 ʔɔk2 caak2 hɔŋ3  
 彼 急ぐ 出る から 部屋  
 「彼は急いで部屋を出た。」

26 khaw5 lak4lɔp3 ʔɔk2 nɔk3pra2theet3  
 彼 こっそりする 出る 外国  
 「彼はこっそり外国に出た。」

27 khaw5 ʔɛp2 ʔɔk2 caak2 baan3 dooymay3bɔk2khray  
 彼 こっそりする 出る から 家 (誰にも言わない)  
 「彼は誰にも言わないでこっそり家から出た。」

/liɑŋ3/ (避ける)、/riip3/ (急ぐ)、/lak4lɔp3/ (密やかに行く)、/ʔɛp2/ (こっそりする) という動詞は単独で用いることができるが、動詞連続構造内の動詞 1 の位置に来るとき、これらの動詞が文全体の意味を満たさないため、もう一つの動詞を必要とする。それはこの四つの動詞の意味を補うからだ。例えば、

28 khaw5 riip3 ʔɔk2 caak2 hɔŋ3  
 彼 急ぐ 出る から 部屋  
 「彼は急いで部屋を出た。」

29 \* khaw5 riip3 caak2 hɔŋ3  
 彼 急ぐ から 部屋  
 「彼は急いで部屋から～」

以上の例は/?ɔk2/がないと、非文となる。以下の例もそうだが、/?ɔk2/がないと、非文となる。「家から」という要素があったから、/ʔɛp2/だけではこの文の述語として用いられない。したがって、動詞 2 である/?ɔk2/が必要となる。

30 khaw5 ʔɛp2 ʔɔk2 caak2 baan3 dooymay3bɔk2khray  
 彼 こっそりする 出る から 家 (誰にも言わない)  
 「彼は誰にも言わないでこっそり家から出た。」

30(a) \* khaw5 ʔɛp2 caak2 baan3 dooymay3bɔk2khray  
 彼 こっそりする から 家 (誰にも言わない)  
 「彼は誰にも言わないで家からこっそりする。」

30(b) khaw5      ?ɔk2      caak2      baan3      dooymay3bɔk2khray  
 彼              出る      から      家      (誰にも言わない)  
 「彼は誰にも言わないで家から出た。」

(30a)の例は、動詞 1/?ɛp2/そのものは述語としてまだ完全に意味を示すことができず、そのためもう一つの動詞を必要とする。それは動詞 1 の意味を完全にするためには必要な要素であるからだ。(Thepkanjana 2006)

両動詞の意味的な関係をみると、動詞 1 の位置に来る以上の四つの動詞は付属的な意味を示すのに対し、動詞 2 の位置に来る動詞/?ɔk2/は重要な意味を示すと言えるであろう。

以上の用例から分かるように、動詞 1 の位置に来る動詞は、動詞 2 の行為を表すのにある動作態度を示す。例えば、こっそりするような行為や、慌ててするような行為などである。それでも、それらの行為はどんな行為なのか、はっきり想像することはできない。また、その四つの動詞の中では/riip3/ (急ぐ)、/?ɛp2/ (こっそりする)、/lak4lɔp3/ (密やかに行う) が副詞的な意味を示すように思われるものである。これらは/lian3/ (避ける) より多くの動詞の前に現れることができる。

### 3) もう一つの動詞が外方向への移動を表す場合

「/?ɔk2/, /khaw3/ (入る)」といった方向を表す動詞は移動動詞のひとつである。今回の研究では、動詞連続構造の動詞 2 の位置に来る動詞は外方向への移動を表す/?ɔk2/なので、ほとんどのものはこのような意味関係を示す。Thepkanjana(1986, 2006) は、動詞連続構造は方向を表す動詞が一つ以上現れることができると主張した。それに、方向を表す動詞は移動と方向を表すだけではなく、ほかの意味を示すこともある。例えば、移動するときの動作態度や移動経路などである。また、移動を表す動詞は、動詞連続構造内で現れる順序が決定的に決められるものである。したがって、/?ɔk2/の後に話し手がいる場所に視点を置くことを表す動詞で、来ることができるのは/pay/ (行く) と/maa/ (来る) だけであろう。このことに関しては、前述したので、ここでは省略したい。また、方向を表す動詞は動詞連続構造の動詞 1 として現れることもできる。

このような意味関係を示すものは動詞 1 が具体的な移動を示すだけではなく、抽象的な移動を示すこともできる。例えば、情報伝達を表す動詞、思考を表す動詞などである。

31 khaw5      phuut3 ?ɔk2      maa      yaan2nan4  
 彼              言う      出す      来る      そのような  
 「彼はそのようなことを言い出したんだ。」

32 khaw5 takoon ?ɔk2 pay  
 彼 叫ぶ 出す 行く  
 「彼は叫んだ。」

33 khaw5 khamnuan tualeek3 nan4 ?ɔk2 maa  
 彼 計算する 数字 その 出す 来る  
 「彼は計算してその数字を出した。」

動詞 1 の後に連続した/?ɔk2/は動詞 1 の行為に外方向への移動という意味を付け足すことになる。このような性質を持つものは次のようなパターンを持つ。多い順から並べることにした。

1. 動詞 1 2 項 動作主 対象 } 2 項 動作主 対象  
 動詞 2 1 項 対象 }

34 phuak3khaw5 khen5 ruua ?ɔk2 pay  
 彼ら 押して前へ行かせる 船 出る 行く  
 「彼らは船を押し出した。」

2. 動詞 1 2 項 動作主 対象 } 3 項 動作主 対象 起点  
 動詞 2 2 項 対象 起点 }

35 ?anthaphaan lay3 nak4thooŋ3thiaw3 ?ɔk2 caak2 to?4  
 暴力団の人 追い払う 観光客 出す から テーブル  
 「暴力団の人は観光客をカジノの場から追い出した。」

3. 動詞 1 1 項 動作主 } 1 項 動作主  
 動詞 2 1 項 対象 }

36 khaw5 ?aacian ?ɔk2 maa  
 彼 嘔吐する 出る 来る  
 「彼は嘔吐した。」

4. 動詞 1 2 項 動作主 対象 } 3 項 動作主 対象 着点  
 動詞 2 2 項 対象 着点 }

- 37 chan5 caʔ2 phaa luuk3 ʔɔk2 khaaŋ3nɔk3  
 私 未来 連れる 子供 出る 外  
 「私は子供を外へ連れて行く。」

以上、動詞連続構造の/ʔɔk2/が動詞 2 の位置に来るとき、動詞 1 とどのような意味的な関係にあるのか、述べてきた。一つ注目したいのは、動詞 1 と連続して、動詞 2 の/ʔɔk2/の項を取るのではなく、動詞 1 の項を取ることになるものもある。このパターンは最も多かった。/ʔɔk2/が外方向への移動という意味を表すものが多い。

1. 動詞 1 2項 動作主 対象 } 2項 動作主 対象  
 動詞 2 1項 対象 }

- 38 kammakaan cap2 saʔ2laak2 ʔɔk2 maa læw4  
 委員 とる 宝くじ 出す 来る ~た  
 「委員が宝くじをもう取り出した。」

また、一つしか見つからなかったのだが、以下のようなパターンもある。

2. 動詞 1 2項 動作主 対象 } 2項 動作主 対象  
 動詞 2 1項 動作主 }

- 39 khaw5 faa2 doŋsa2kɛɛ ʔɔk2 pay  
 彼 冒す 林 出る 行く  
 「彼は苦労して林の中を歩いて外へ出た。」

#### B. /ʔɔk2/が動詞 2 の位置に来る動詞連続構造の形態的、統語的な性質

1) 動詞連続構造の構成要素は動詞が二つ以上連続して結成されるものである。Thepkanjana(1986, 2006)では、方向を表す動詞連続構造なら、二つ以上連続することができるとしている。本研究では、動詞 2 の位置に来る動詞は/ʔɔk2/という外方向への移動を表す動詞であるため、/ʔɔk2/の後には話し手がいる場所に視点を置くことを表す動詞がまた来ることができる。動詞連続構造の動詞 1 と動詞 2 の間には、別の要素が入ることもできる。それは動詞 1 の目的語として示される名詞である。例えば、

- 40 khaw5 yip2 kra2daat2 ʔɔk2 caak2 lin4chak4  
 彼 取る 紙 出す から 引き出し  
 「彼は引き出しから紙を取り出した。」

- 41 khaw5 khon5 khaya2 ?ɔk2 pay  
彼 運ぶ ごみ 出す 行く  
「彼はごみを運び出した。」

以上の用例から見ると、/?ɔk2/が動詞連続構造の動詞 2 の位置に来るとき、外方向への移動を表すため、/?ɔk2/は自動詞として用いられると思われる。しかし、今回の調査では、/?ɔk2/が他動詞である場合もあるということが分かった。/riip3/ (急ぐ) という動詞の後でしか/?ɔk2/が他動詞であることはない。

- 42 khaw5 riip3 ?ɔk2 ruua  
彼 急ぐ 出す 船  
「彼は急いで船を出した。」

## 2) 動詞連続構造の文法的な性質

動詞連続構造は、一つの動詞だけにテンス、アスペクト、ムードなどの統語的カテゴリーを表す要素がつき、全体の動詞連続をカバーする。/?ɔk2/が動詞連続構造内の動詞 2 の位置に来るとき、動詞 1 との間には否定辞が入ることができない。否定したいときは、否定辞は動詞連続構造全体の動詞 1 の前につかなければならない。

## 3) 単文(monoclausal)であること

現在、動詞連続構造についての研究をする言語学者は、動詞連続構造が単文だということに同意している。単文の構造を持っている動詞連続構造の中の個々の動詞が合わさって一つの述部としての役目を示す。単文になることは、その動詞連続構造内に入る動詞それぞれがテンスやムードなどを示す要素が自由につくことができない。(Thepkanjana 2006)また、動詞連続構造内の動詞 1 と動詞 2 の間にはポーズが入らないため、話者が発言するとき、その動詞連続構造がある文は単文として認められるだろう。

/?ɔk2/が動詞連続構造内の動詞 2 の位置に来る場合も、以上のように説明できるだろう。単文となることは、ほとんどその動詞連続構造内に入る動詞は、それぞれ同じ主語を持っていることが述べられてきたが、動詞 1 の意味が抽象的な意味を示すときや、動詞 1 の目的語が動詞 2 の主語になるときなどがあるので、すべての動詞連続構造は同じ主語を持っているというわけではない。

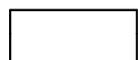
## 4) 動詞連続構造内の一つの動詞がもう一つの動詞の様態を示すことがある

動詞連続構造内の動詞は、文の中で現れている参与者 (人物、物) (participant)の述部としての役目を示すこと、あるいは動詞連続構造内の一つの動詞がもう一つの動詞

の補部としての役割を示すこともできる。基本的な動詞連続構造内の動詞連続は、動詞1が動詞2の補部となることが圧倒的に多かった。(Thepkanjana 2006:150)

動詞連続構造内の動詞1が動詞2の補部となることもあれば、動詞2が動詞1の様態を示すこともある。それについて Thepkanjana はこのように分析している。

4.1) 動詞2の主語が動詞1の主語である場合と動詞1の目的語である場合がある。



[NP V1(NP) + V2(NP)]S (Thepkanjana 2006)

このグループに入る動詞連続構造は、動詞連続構造内のそれぞれの動詞が文の中で現れている参加者(participant)の述部としての役目を持ち、いわゆる動詞2の主語が動詞1の主語である場合と動詞1の目的語である場合がある。例えば、本研究の/?ɔɔk2/が動詞連続構造の動詞2の位置に入る場合をみよう。

- ・参加者が同じ場合、

43 khaw5 wiŋ3 ?ɔɔk2 caak2 sanaam5  
 彼 走る 出る から グランド  
 「彼はグランドから走って出ていった。」

- ・参加者が同じではない場合、

44 khaw5 biip2 yaa ?ɔɔk2 caak2 lɔt2  
 彼 押す 薬 出す から チューブ  
 「彼はチューブを押して薬を出す。」

一般的には、動詞連続構造内ではそれぞれの動詞は、少なくとも同じ argument を一つ持っている。ほとんどの動詞連続構造が持っている argument といえば、主語である。したがって、多くの動詞連続構造は同じ主語を持っている(subject-sharing)と言えるだろう。/?ɔɔk2/もそうなのである。この場合、動詞1のところに来る動詞は自動詞で、主語が同一だということになる。動詞1の位置に来る動詞は位置変更を表す動詞、体位を変えることを表す動詞(自)、視覚を表す動詞、拡大を表す動詞(自)となる。

45 khaw5 kradoot2 ?ɔk2 naa3taan2

彼 飛ぶ 出る 窓

「彼は窓から飛び出した。」

46 ruua lɛɛn3 ?ɔk2 talee

船 走る 出る 海

「船は海へ走って出て行った。」

そのほかに、動詞連続構造内でのそれぞれの動詞は、他動詞であり、別々の目的語を示すこともある。(Thepkanjana2006:153-154) /?ɔk2/もこのような性質を持っている。

47 khaw5 cha4ŋook3 naa3 ?ɔk2 thaan pra2tuu

彼 突き出す 顔 出す 方面 ドア

「彼は顔をドアから突き出した。」

48 khaw5 khap2 rot4 ?ɔk2 taan2cajwat2

彼 運転する 車 出る 地方

「彼は地方へ車を運転していった。」

以上の(48)を細かく見てみよう。

48(a) khaw5 khap2 rot4

彼 運転する 車

「彼は車を運転した。」

48(b) rot4 ?ɔk2 taan2cajwat2

車 出る 地方

「車は地方に出た。」

動詞連続構造の動詞 1 である /khap2/ の目的語が /rot4/ であるのに対し、動詞 2 /?ɔk2/ の目的語が /taan2cajwat2/ である。つまり、それぞれの動詞は別々の目的語を示すのである。

また、目的語が同一という動詞連続もある。この場合、動詞 1 と動詞 2 は必ず他動詞である。動詞 2 は動詞 1 の目的を示す。例えば、次のような例である。

49 khaw5 thoot3 plaa kin

彼 揚げる 魚 食べる

「彼は魚を食べるために揚げる。」

- 50 khaw5 cut2 bu2rii2 suup2  
 彼 火をつける タバコ 吸う  
 「彼はタバコを吸うために火をつける。」

しかし、動詞連続構造の動詞 2 の位置に来る/?ɔɔk2/は大体自動詞なので、目的語が同一ということはない。

4.2) 動詞 2 が動詞 1 の様態を示すこと



[NP V1(NP) V2(NP)]S (Thepkanjana 2006)

この種に関しては、Thepkanjana 氏によると、動詞連続構造の動詞 2 の位置に入る動詞が移動や方向を示す動詞の場合、4.1) のグループに入れるのがよいか 4.2) のグループに入れるのがよいか、まだ議論があるようだ。本研究の/?ɔɔk2/はどうであろう。

- 51 khaw5 kradoot2 ?ɔɔk2 naa3taan2  
 彼 飛ぶ 出る 窓  
 「彼は窓から飛び出した。」
- 52 phom5 wiŋ3 ?ɔɔk2 caak2 baan3  
 私 走る 出す から 家  
 「私は家から走り出した。」

動詞 2 のところに入る/?ɔɔk2/は外方向への移動を表すが、動詞 1 のところに来る動詞は移動経路を示している。それは動詞 1 が具体的な移動を示すからである。したがって、動詞 2 のところに来る/?ɔɔk2/が文の中での参加者の述部としての役目を持つか、動詞 1 の様態を示すか、まだはっきり認定できない。だが、以上のような動詞連続構造がどちらのグループにも当てはまるのではないかと解釈することもできる。なぜかという、動詞 2 がその文の中で現れている参加者の述部としての役目を果たすと同時に、その文で行われた出来事をさらに説明すると解釈することもできるからであろう。(51) の用例では、主語である「彼」は/kradoot2/ (飛ぶ) という動作と/?ɔɔk2/ (出る) という動作を同時に行う。(52) の用例では、主語である「私」は/wiŋ3/ (走る) という動作と/?ɔɔk2/という動作を同時に行う。それに対して、動詞 2 のところに来る/?ɔɔk2/が、抽象的な意味、メタファー的な意味で用いられ、また、動詞 1 のところに来る動詞も具体的な移動を示すものではない場合、動詞 2 である/?ɔɔk2/の意味は抽象

的に解釈されるようになる。したがって、このようなものは/?ɔk2/が動詞 1 の意味を拡張すると解釈するしかないであろう。例えば、以下のような例である。

53 suaa3 tuanan4 suay5 ?ɔk2

ブラウス その きれい 強調

「そのブラウスはとてもきれいだね」 (他の人はそう思っていないかもしれません)

54 feen booy phoom5 ?ɔk2 yaan2nan4

彼女 ボーイ やせる 強調 そのような

「ボーイさんの彼女はそんなにやせてるならば、・・・」

以上の/?ɔk2/の用法は、/?ɔk2/そのものが動詞として考える言語学者もいれば、文法化されて動詞ではないと考える言語学者もいる。本研究でいう動詞連続構造というものは、それぞれの動詞が単独で使われるとき、動詞連続構造に現れたときの意味と同じ意味を持たなければならないと定義したので、以上のような用例は/?ɔk2/が副詞としての役目を果たすと解釈したい。Wongsri(2004)でも、この/?ɔk2/は副詞で、「明快に」という意味だとした。

## 5) 動詞連続構造の生産性

タイ語は、ほとんどの動詞が動詞連続構造内に入ることができるので、生産性が高いと言えるであろう。(Thepkanjana : 2006) ただし、どの動詞でも結合することができるというわけではない。まだ何かの制限があるようだ。今回の調査では、動詞連続構造の動詞 2 のところに入る/?ɔk2/と連続して、動詞 1 の位置に入る動詞は全部で 280 語だった。Chafe(1970)の動詞分類を基準として下位分類すると、十二種類に分けることができる。以下のようなものである。

### 1. 動作動詞 (Action Verbs)

#### 1.1 位置変更を表す動詞 (Verbs of Displacement) : 61 語

/bin/ (飛ぶ)、/dæən/ (歩く)、/khlaan/ (這う) など

#### 1.2 他のものを移動させることを表す動詞 (Verbs of Transfer) : 107 語

/chæən/ (招く)、/duŋ/ (引っ張る)、/khaay5/ (売る) など

#### 1.3 体位を変えることを表す動詞 (Verbs of Orientation) : 19 語

/naŋ3/ (座る)、/yat2/ (伸ばす)、/cha4ŋook3/ (顔を突き出す) など

#### 1.4 視覚を表す動詞 (Verbs of Vision) : 2 語

/mɔŋ/ (眺める)、/mæə2mɔŋ/ (ぼんやりして眺める)

#### 1.5 情報伝達を表す動詞 (Verbs of Communication) : 25 語

/phuut3/ (話す、言う)、/takoon/ (叫ぶ)、/thaam5/ (たずねる) など

1.6 感情を表す動詞 (Verbs of Feeling) : 7 語

/rɔŋ4hay3/ (泣く)、/hua5rɔʔ3/ (笑う) など

2. 状態動詞 (Stative Verbs) : 7 語

/taŋ2/ (違う)、/haŋ2/ (離れる) など

3. 過程動詞 (Process Verbs)

3.1 創造を表す動詞 (Verbs of Creation) : 20 語

/ŋɔk3/ (芽が出る)、/phalit2/ (生産する)、/phim/ (印刷する) など

3.2 思考を表す動詞 (Verbs of Thought) : 3 語

/khit4/ (考える)、/kamnuan/ (計算する) など

3.3 破壊を表す動詞 (Verbs of Destruction) : 8 語

/chet4/ (拭く)、/laŋ4/ (洗う)、/lop4/ (消す) など

3.4 分離を表す動詞 (Verbs of Separation) : 13 語

/beŋ2yɛk3/ (分離する)、/camnɛk3/ (分類する) など

3.5 拡大を表す動詞 (Verbs of Expansion) : 8 語

/khayaay5/ (拡大する)、/phɛ2/ (広がる) など

それぞれの動詞分類をみると、動詞連続構造内の /ʔɔk2/ の前に来る動詞は、他のものを移動させることを表す動詞が圧倒的に多かった。107 語だった。それに対し、最も少なかったのは、視覚を表す動詞だった。

/ʔɔk2/ の後にはほかの動詞が連続することもできる。例えば、方向を表す動詞 /pay/ (行く)、/maa/ (来る) などである。Thepkanjana(1986)では、方向を表す動詞は一つ以上表すことができ、それぞれの動詞は順序が決定され、その /ʔɔk2/ の後に来られるのは、/pay/ (行く) と /maa/ (来る) なのである。また、Wongsri(2004)では、/ʔɔk2/ が動詞の前に来るとき、動詞 2 の位置に入る動詞の動作の開始を表すこともあると述べた。/ʔɔk2/ の後にはどのような動詞が連続することができるのか、見てみよう。

### 3.2 /ʔɔk2/ が動詞 1 の位置に来る場合

本研究では、/ʔɔk2/ が動詞 2 のところに来るときの意味的、統語的分析をしてきたが、すべての対象は語彙的な意味をもつことが分かった。タイ語では、「雨が降り出した。」などの日本語の「出す」と同じように「開始」の意味を表せないであろうと考えたが、そうではないようだ。/ʔɔk2/ が動詞連続構造の動詞 1 の位置に来れば、開始の意味を示すことができるということがわかった。Wongsri(2004)が認知意味論の観点で、文の中で様々な位置に現れた /ʔɔk2/ の表しているそれぞれの意味の関連性につ

いて述べ、/ʔɔɔk2/の意味を分類し、いくつかの意味を示した。その中では、/ʔɔɔk2/が動詞の前に来るとき、動詞 2 の位置に入る動詞の動作の開始を表すことが述べられている。本研究では、/ʔɔɔk2/が動詞連続構造の動詞 1 の位置に来ることがどのくらいあるか、どんな動詞が/ʔɔɔk2/の後に連続することができるのか、意味的、統語的な観点で考察していきたい。

まず、タイ語のコーパス<sup>(3)</sup>を利用し、/ʔɔɔk2/ということばを入力したら、6300 例が出た。6300 例の中から、動詞連続構造で、/ʔɔɔk2/が動詞 1 の位置に来るものを選び出すと、319 例が得られた。5.06%だった。この 319 例の中には、/ʔɔɔk2/の後に来る動詞は移動を表すものもあれば、移動を表さないものもある。移動を表さないものはほとんど/ʔɔɔk2/の後に連続するのではなく、話し手がいる場所に視点を置くことを表す /pay/ (行く) や /maa/ (来る) が先に/ʔɔɔk2/の後につく。それに対し、/ʔɔɔk2/の後に /pay/ (行く) や /maa/ (来る) が来るのではなく、別の動詞がすぐ/ʔɔɔk2/の後につく場合、319 例の中から 204 例があった。3.24%だった。全体の用例をみると、/ʔɔɔk2/が動詞連続構造の動詞 1 の位置に入り、動詞 2 のところには /pay/ (行く) や /maa/ (来る) のではなく、別の動詞がすぐ/ʔɔɔk2/の後に連続する場合は 64%だった。

また、/ʔɔɔk2/の後に来る動詞が移動動詞ではない場合、情報伝達を表す動詞が圧倒的に多かった(63 例, 19.75%)。また今回のコーパスから得られた用例は、新聞からとった用例が最も多かった(137 例, 43%)。

動詞 2 のところに来る動詞は、全部で 114 語ある。移動動詞の場合次のようなものである。

/dænthaaŋ/ (旅行する)、/wiŋ3/ (走る)、/dæŋ/ (歩く)、/yiam3yian/ (訪問する)、/tit2taam/ (随行する)、/phanuat2/ (出家する)、/dæŋlen3/ (散歩する)、/thɔɔŋ3thiaw3/ (観光する) などである。

移動動詞ではないものは、/khon4haa5/ (探す)、/chaay5/ (上映する)、/ronnarɔŋ/ (行動する)、/chuay3/ (助ける)、/laa3sat2/ ( (鳥獣を) 狩る)、/yuuunyan/ (主張する)、/phuut3/ (言う)、/pra2kaat2/ (発表する)、/rop4/ (戦闘する)、/riak3rɔɔŋ4/ (要求する)、/wi4caan/ (非難する)、/patiseet2/ (否定する)、/yɔɔmrap4/ (認める)、/deet2/ (デートする)、/truat2sɔɔp2/ (調べる)、/phrɛ3phaap3/ (放送する)、/camnaay2/ (販売する)、/chok4/ (ボクシングをする)、/binthabaat/ (托鉢する)、/haa5plaa/ (漁業をする)、/pok2pɔɔŋ3/ (保護する)、/samaakhom/ (交際する)、/thamjaan/ (仕事をする)、/haa5kin/ (稼ぐ)、/tɔɔp2too3/ (討論する)、/phaconphay/ (冒険する)、/tɔɔ2taan3/ (抵抗する)、/tuan/ (注意する)、/tiiphim/ (印刷する)、/sam5ruat2/ (調査する) などである。

/ʔɔk2/が動詞連続構造の動詞 1 の位置に来る場合、どのような意味的、統語的要素を持っているのか、分析していきたい。

A. 動詞連続構造の動詞 1 の位置に来る/ʔɔk2/と動詞 2 との間の意味的な関係

1) 二つの出来事が同時に行われる

/ʔɔk2/が動詞連続構造の動詞 1 の位置に来ると、二つの出来事は同時に行われることを示す。/ʔɔk2/が動詞 1 の位置に来る場合、/ʔɔk2/のあとに来る動詞は移動動詞や情報伝達を表す動詞などである。/ʔɔk2/のあとに来る動詞が移動動詞ならば、二つの出来事は同時に行われるということになる。つまり、動詞 1 と動詞 2 の/ʔɔk2/はひとまとまりになり、一つの移動を表す出来事を示すことになる。また、それらの出来事は同じ主語で行われることを示す。例えば、以下のような例である。

55 naaysom5chaay ʔɔk2 dənthaaŋ caak2 thaa3ʔaakaat2sayaan chianmay2  
 ソムチャイさん 出る 旅行する から 空港 チェンマイ  
 muaa3weelaa sip2naali4kaa

10時

「ソムチャイさんは10時にチェンマイ空港から出発した。(旅に出た)」

56 paaran ʔɔk2 win3 phuaa3thii3caʔ2day3 pay koot2  
 パーランさん 出る 走る ために 行く 抱く  
 khonthiithəhooy5haa5thii3sut2

最も恋しい人

「パーランさんは最も恋しい彼を抱きに行くために走り出した。」

以上の例をみると、/ʔɔk2/と /dənthaaŋ/または /ʔɔk2/と/win3/の意味がひとまとまりになり、一つの移動の出来事を示すことになる。/ʔɔk2/という動詞があったおかげで、その移動行為がスタートするということが示される。つまり開始の意味を示すのである。それに、/ʔɔk2/が出発点からの移動行為ということ強調するという意味も示される。

2) 二つの出来事が連続して行われる

/ʔɔk2/のあとに来る動詞が移動動詞ではない場合、二つの出来事は連続して行われるということになる。例えば、以下のような例である。



/ʔɔk2/が「動作開始」という意味を示すのではなく、「(何のために) あるところへ移動する」という意味を示すことになるだろう。

B. /ʔɔk2/が動詞1の位置に来る動詞連続構造の形態的、統語的な性質

1) 動詞連続構造の構成要素

/ʔɔk2/が動詞連続構造の動詞1の位置に来るとき、以上に説明したように動詞2のところに来られる動詞は、移動動詞や情報伝達を表す動詞などである。また、/ʔɔk2/とほかの動詞の間に来られるのは、/pay/ (行く)、/maa/ (来る)のみだと言えるだろう。筆者の調べた限りでは、両動詞の間には別の要素が入ることができない。例えば、/ʔɔk2/が動詞連続構造の動詞2の位置に来るとき、動詞1の目的語が動詞1と/ʔɔk2/の間に現れることができるが、/ʔɔk2/が動詞連続構造の動詞1の位置に来るときはそのようなことはない。ただし、一つだけ可能性があるのは/ʔɔk2 win3/という動詞連続だと思われる。/ʔɔk2/と/win3/の間には/tua/ (体、身体)が入ることができる。例えば、以下のような例である。

60 khaw5 ʔɔk2 tua win3 chaa5 kwaa2 khonʔuun2

彼 出す 体 走る 遅い より 他人

「彼は誰よりもスタートが遅れた。遅くスタートした。」

しかし、このような文は、現在では/ʔɔk2 tua win3/ではなく、/ʔɔk2 sataat4/という風に頻繁に表現するようになった。したがって、/ʔɔk2/が動詞連続構造の動詞1の位置に来るときは、動詞2との間には、/pay/ (行く) や/maa/ (来る) しか入れないということになるだろう。

61 yiaw2 ʔɔk2 haa5kin weelaaklaanjhuun

鷹 出る えさを探す 夜

「鷹は夜になると、えさを探す。」

62 suuu2tay3wan5 ʔɔk2 maa riak3rɔŋ4 hay3 thuk4faay2 yuu2naykhwamsanjop2

台湾報道陣 出る 来る 要求する ように みんな 落ち着く

「台湾報道陣はみんなに落ち着くようにと願いを告げた。」

63 naaysom5chaay ʔɔk2 maa yɔmrap4 waa3 pen khonnayphaap3 cin

ソムチャイさん 出る 来る 認める と だ 写真の人物 本当

「ソムチャイさんは自分がその写真の人物だと認めた。」

## 2) 動詞連続構造の文法的な性質

以上述べたように、動詞連続構造といえば、テンス、アスペクト、ムードなどの文法的な性質を表す要素が一つの動詞に付き、それらの要素は全体の動詞連続をカバーすることになる。/?ɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 の位置に来るとき、動詞 2 との間には否定辞が入ることができない。否定したいときは、/?ɔk2/が動詞連続構造の動詞 2 の位置に来るときと同様に、否定辞は動詞連続構造全体の前につかなければならない。

64 phuu3waa3raat3chakaancanjwat2 may3day3 ?ɔk2 phop4pa? khaa3raat3chakaan  
知事 否定 出る 対面する 役員  
mua3waannii4

昨日

「知事は昨日役員と対面しなかった。」

65 naaysom5chaay may3day3 ?ɔk2 maa yɔmrap4 waa3 pen khonnayphaap3 ciŋ  
ソムチャイさん 否定 出る 来る 認める と だ 写真の人物 本当  
「ソムチャイさんは自分がその写真の人物だとは認めていない。」

66 thiaw3binnan4 may3day3 ?ɔk2 dænthaan pay kruŋ?amsatædam  
そのフライト 否定 出る 旅行する 行く アムステルダム  
「そのフライトはアムステルダムへ出発しなかった。」

## 3) 単文(monoclausal)であること

/?ɔk2/が動詞連続構造の動詞 2 のところに現れたときに説明したように、動詞連続構造のもう一つの性質は単文であることについて言語学者は同意見だった。そのため、それぞれの動詞は独立し、個々の動詞にテンスやムードなどを示す要素が付くことができず、その動詞連続構造内の二つの動詞がお互いに合わさって一つの述部としての役目を持っていることになるといえるだろう。また、単文であるということは、連続した個々の動詞は同じ主語を持っていることが当たり前だといえるだろう。

今回コーパスから得られた用例をみると、/?ɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 の位置に来るとき、すべての用例に現れた動詞連続構造が同じ主語を持っていることが分かる。

## 4) 動詞連続構造内の一つの動詞がもう一つの動詞の様態を示すことがある。

以上説明したように、動詞連続構造内の動詞は、文の中で現れている参与者（人物、物）(participant)の述部としての役目を示すこと、あるいは動詞連続構造内の一つの動詞がもう一つの動詞の補部としての役目を示すこともできる。一つの動詞がもう一つ

の動詞の様態を示すのは動詞連続構造でしか現れない。また、一般的には、動詞連続構造内ではそれぞれの動詞は少なくとも同じ *argument* を一つ持っている。ほとんどの動詞連続構造が持っている *argument* といえ、主語であることだ。(Thepkanjana 2006:150)

/ʔɔk2/が動詞連続構造の動詞 1 のところに来るとき、すべての動詞が文の中で現れている参加者の述部としての役目をもつ動詞連続構造でなければならない。また、文中で現れている参加者(participant)の中では、主語としての役目を果たしている名詞が同じものでなければならない。以下のような例である。

67 phom5 ʔɔk2 win3 pay khaaŋ3naa3 ʔiik2nɔy2 taam thanon5thii3thoɔt3yaaw  
私 出る 走る 行く 前方 もう少し 沿う 道  
ʔɔk2caak2muu2baan3

「私は村の道からその道に沿ってもっと前のほうへ走っていった。」

68 yiaw2 ʔɔk2 haa5kin weelaaklaaŋkhuuun  
鷹 出る 餌を探す 夜

「鷹は夜になると、えさを探す。」

以上述べたように、/ʔɔk2/が動詞連続構造内に動詞 1 として入るとき、動詞 1 と動詞 2 が必ず同じ主語を持つことが分かる。

#### 5) 動詞連続構造の生産性

今回の調査では、動詞連続構造の動詞 1 のところに入る/ʔɔk2/と連続して、動詞 2 の位置に入る動詞は全部で 114 語だった。/ʔɔk2/とその連続するもう一つの動詞の間には、/pay/ (行く) や/maa/ (来る) が入ることができる。特に動詞 2 の位置に来る動詞は移動動詞ではなければ、/pay/ (行く) や/maa/ (来る) が介入することが多い。/ʔɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 の位置に来るのは動詞 2 の位置に来るほど多くはない。ほかの動詞と連続する数をみると、/ʔɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 の位置に来るとき、319 例得られたが、動詞 2 の位置に来るとき、1369 例だった。/ʔɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 の位置に来るのと動詞 2 の位置に来るのを比べたら、4分の1ぐらいだという結果だった。/ʔɔk2/と連続できる動詞やできない動詞には、おそらく何かの制限があると思われる。それを探るには、さらに詳しい分析が必要となるであろう。

#### 4. まとめ

これまでタイ語の動詞連続構造内に入る/ʔɔk2/が動詞 1 と動詞 2 の位置に現れる際の意味的、統語的な特徴を述べてきた。それらをまとめると、以下ようになる。

- 1) 動詞連続構造そのものは、2語以上の動詞が連続し、これらの動詞それぞれが自立動詞として単文で現れることができ、その動詞の意味も動詞連続構造に現れたときの意味と同じ意味を持たなければならないという点が最も重要な点だと思われる。したがって、動詞 2 のところに来る動詞が自立動詞として現れることができたなら、動詞連続構造として取り上げたい。それに対し、動詞 2 のところに来る動詞が自立動詞として現れることができなかつたら、別のものとしてほしい。例えば、/?aan2 ʔɔɔk2/ということばですが、「読める」という意味で、この/?ɔɔk2/は「可能」の意味を示すため、動詞連続構造ではなく、補助動詞としての役目を持っていると考える。
- 2) 今回の調査では、タイ語のコーパスを利用して、動詞連続構造内に現れる/?ɔɔk2/が動詞 1 のところに来る場合は 319 例だったが、動詞 2 のところに来る場合は 1369 例だった。圧倒的に多かった。
- 3) /?ɔɔk2/が動詞 1 の場合、動詞 2 のところに入る動詞は 114 語だった。それに対して、/?ɔɔk2/が動詞 2 の場合、動詞 1 のところに入る動詞は 280 語だった。/?ɔɔk2/の後に来る動詞は比較的になかった。
- 4) /?ɔɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 や動詞 2 の位置に来るとき、どの場合でも否定辞がその間に介入することができない。ただし、/?ɔɔk2/が動詞 1 の位置に来る場合、動詞 1 と動詞 2 の間には/maa/と/ pay/が来ることがある。それに対して、/?ɔɔk2/が動詞 2 の位置に来る場合、動詞 1 と動詞 2 の間に入るができるのは動詞 1 の目的語のみである。
- 5) /?ɔɔk2/が動詞連続構造の動詞 1 である場合、すべての動詞連続構造において動詞 1 と動詞 2 の主語は同じだったが、/?ɔɔk2/が動詞連続構造の動詞 2 である場合、動詞 1 と動詞 2 の主語は同じだとは限らない。
- 6) /?ɔɔk2/が動詞連続構造内の動詞 1 と動詞 2 のところに来るとき、外方向への移動を示すことができる。つまり、動詞 2 のところに来るとき、もう一つの動詞が外方向への移動を表す場合があるが、動詞 1 として現れるとき、「開始」という意味を示すとともに「外方向への移動」という意味も含まれていると言えるだろう。
- 7) /?ɔɔk2/が動詞 1 の位置に来る場合、「動作開始」という意味を示すことができるということが分かった。しかし、すべての例をそう説明することはできない。「(何のために) あるところへ移動する」という意味を示すこともある。

[注]

(\*) 本稿は、国際交流基金日本研究・知的交流のフェローシッププログラムの支援で作成したものであり、第 29 回学芸日本語文法研究会(2010 年 5 月 15 日、於 東京学芸大学)における研究発表「タイ語の動詞連続構造内で現れる/?ɔɔk2/の意味的、統語的な関係」をもとに加筆・修正したものである。本稿の執筆にあたり、指導教員である杉浦滋子先生から、数多くの貴重なご助言とご指導をいただき、また、東京

学芸大学第29回学芸日本語文法研究会において研究発表の機会をくださった北澤尚先生からも有益なアドバイスをいただいた。日本語文法研究会の発表でも多くの先生方からご助言をいただいた。元指導教員である坂本比奈子先生にも貴重なご意見を賜った。この場をかりて感謝申し上げたい。

- (1) タイ語では、声調が5つある。ここでは、それぞれの声調を数字で示すことにする。ただし、平声はノーマークとする。低声を[2]、下声を[3]、高声を[4]、上声を[5]と記す。
- (2) ?okk2“exit”「出る」、pay “go”「行く」、maa “come”「来る」のところに筆者自身が太字にした。
- (3) 今回の研究では、次のコーパスや小説から実用例を得た。
  1. チュラロンコン大学文学部言語学科の Thai Concordance プログラム (<http://ling.arts.chula.ac.th/ThaiConc/>) このプログラムはタイ語の実用例を探るためのコーパスで、大きさは1400万語程度である。それぞれの用例は新聞、雑誌、小説、法則などからピックアップされたものである。
  2. チュラロンコン大学文学部言語学科の TNC Thai National Corpus (<http://ling.arts.chula.ac.th/TNC/>) 大きさは8000万語程度である。タイ語研究のためにこの電子化コーパスは大変評価されていると思われる。
  3. Southeast Asian Writers Award を受賞した短編小説「クワームスックコンカティ」(The Happiness Of Kati) 筆者自身で読み、用例をピックアップした。

## 参考文献

- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 角田太作(1992)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 富田竹二郎編(1996)『日タイ・タイ日辞典』改訂版 Armorn Printing and Publishing
- Bandhumedha, Navavan (1967) *The Structure of The Nucleus, A Verb Phrase Constituent*, Master's Degree Thesis, Chulalongkorn University.
- Chafe, Wallace L (1970) *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: University of Chicago Press.
- Chantavibulya, Vichintana (1962) *Inter-Sentence Relations in Modern Conversational Thai*, Ph.D. dissertation, University of London.
- Chuwicha, Yajai (1993) *Clausehood in Serial Verb Constructions in Thai*, Ph.D. dissertation, Chulalongkorn University.
- Harabutra, Cha-on (1977) *A Study of Two Verb Concatenation in Thai Sentences*, Master's Degree Thesis, Chulalongkorn University.

- Phanupong, Vichintana (1989) *Thai Language Structure : Grammar*. Bangkok : Ramkhamhaeng University Press.
- Prasitratthasin, Amara (eds.) (2006) *Controversial constructions in Thai grammar : relative clause constructions, complement clause constructions, serial verb constructions, and passive constructions*. Chulalongkorn University Press.
- Raatchabandittayasathan (1999) *Photcanaanukrom chabap Raatchabandittayasathan 2542*. Bangkok : Aksornjareonthat Press. (『タイ国学士院版タイ語辞典』)
- Saralamba, Chatchawadee (1995) *A Conceptual Study of KHAW3*, Ph.D. dissertation, Chulalongkorn University.
- Thepkanjana, Kingkarn (1986) *Serial verb constructions in Thai*, Ph.D. dissertation, The University of Michigan.
- Wongsri, Katbandit (2004) *A Semantic Network of /ʔɔk2/ 'OUT' in Thai: A Cognitive Semantic Study*, Master's Degree Thesis, Chulalongkorn University.

